

月刊

# みんぱく

● 国立民族学博物館

2009

6

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 | ISSN0386-2289  
平成21年6月1日発行 | 第33巻第6号通巻第381号

特集●

常設展示リニューアル〈アフリカ〉





# タブノキの根方の打ち明け話

わたなべ いちえ  
渡辺 一枝

1 エッセイ 世界へ●世界から  
タブノキの根方の打ち明け話  
渡辺 一枝

2 特集 常設展示リニューアル(アフリカ)  
新たなコンセプトのもとに  
装いを大胆に一新  
アフリカの人たちの「顔が見える展示」をめざして… 竹沢 尚一郎  
歴史を掘りおこす アフリカの豊かな歴史の実像  
…… 竹沢 尚一郎  
「仮面の森」の今 …… 吉田 憲司  
民俗文化の栄光と受難 …… 飯田 卓  
装う 世界経済につながるアフリカの布 …… 三島 禎子  
装う アフリカンビーズへの思い …… 池谷 和信  
憩う 架空空間に暮らしを再現する …… 川口 幸也

8 モノ・グラフ  
怒れる虎のペルソナ  
ポン教の聖者、タクラ・メバル  
津曲 真一

10 地球ミュージアム紀行  
ハノイ、ベトナム革命博物館  
「革命」という歴史と博物館  
笹原 亮二

11 表紙モノ/語り  
クバ王国の摂政の衣装  
吉田 憲司

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
南の島の楽観主義  
丹羽 典生

15 時論 新論 理想論  
語り合い 寄り添う つながり  
陳 天璽

16 多文化をささえる人びと  
在日をつなぐ、祖国につなぐ、世界につなぐ  
特定非営利活動法人コリアNGOセンター  
藤井 幸之助

18 生きもの博物誌  
人とともに生きてきた特別天然記念物  
(イリオモテヤマネコ)  
蛸原 一平

20 歳時世相篇  
ヴァヌアツのナゴル  
豊作を祈願する命かけの農耕儀礼  
白川 千尋

22 フィールドで考える  
スリランカの布袋さま  
鈴木 晋介

24 みんぱくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記

**区** 切り打ちで四国遍路を歩き繋いでいる。歩いていると、時々思いがけないことに出会う。この間もこんなことがあった。土佐の国の山中でのことだ。

狭い山道を登っていると、突然上から声が出た。「お遍路さん、わしゃ六〇年前に、あんたが立っている、今あんたが立っているそこで、ちょうどそこで一〇〇円を拾ったんじゃないよ。こんなことこれまで誰にも話したことはなかったけれど、ほれ、ちょうどあんたがそこに立ってたんで話す気になった。あん時は空襲で町はみんな焼けてな、たくさんの人が亡くなったたり家が焼けたたりした。けどこちらの神社は氏子も大勢いたしみんな信心しておったし、祭りの日にはいつもどおりにぎやかに祭りをするちゆうことだった。わしはこん山に薪拾いに来とって、これを背負ってうちに帰ったら、姉ちゃんと神社に行くこうと思つて急いで降りてた。

そしたらほれあんた、あんたが立ってるその足元に一〇〇円が落ちてたのよ。今の一〇〇円じゃない、あの頃の一〇〇円ちゃあ、えらいもんでえ。神さん仏さんに手合わせて、わしや拾って帰つたさ。

父ちゃんも母ちゃんもいないで姉ちゃん二人きりで貧乏してたから、それで布団買って食いもん買って、祭りの神社に行つたですよ。ああ、こんなこと話すのは今あんたがはじめてですよ。」

見知らぬ人からの突然の打ち明け話に、驚くよりもなぜか微笑ましく嬉しくもなり、また戦時中や空襲時のことなどこちらから乞うて聞かせてもらった。

私が四国遍路を思い立つたのは神妙な信心からではなく、チベットに通い続けチベット人にとつての聖地も幾度も訪ねていながら日本を知らない自分に気づき、日本人にとつての「聖地」を歩いてみたいという単純な好奇心からだった。歩き始めてみるとそこに行くのはとても心地

よく、それは住まいのある都心にはない山道や海岸の道、田園の中を歩き、そうした空気の中に身を置くことにもよるのだらう。けれど、それだけではないうちにも思う。もしかすると古から数多の信心深い人々が辿ってきた道には、都会の舗装された道にはない「道格」のようなものが備わっているのかもしれないと思う。

遍路道を歩いていると時々私は、チベットに居るときと同じような心地になる。チベットに居るときは、ただただその地に居ることが嬉しくて、どんな天気だろうがそこに人が居ようがまた居まいが、そこに居ること自体が心地よい。敬虔な仏教徒であるチベット人たちの地に居る時と同じ、そんな心地になるのだ。土地の風格というものかもしれない。

行きずりの人の打ち明け話も、あの大きな木の生えていたあの場所が話させたに違いない。

作家。1945年、中国ハルビンに生まれる。1987年3月までの18年間、東京近郊の保育園に保母として勤務。退職の翌日、初のチベット旅行に出かけ、チベット自治区、ラサ、シガツェ、サキヤを訪ねる。以来、チベット自治区、青海省、四川省、ラダック、ムスタング、ドルポのチベット文化圏への旅を重ねている。著書に、『バター茶をどうぞ 蓮華の国のチベットから』2001年、文英堂、『叶うことならお百度参り——チベット聖山巡礼行』2006年、文藝春秋などがある。



# 新たなコンセプトのもとに装いを大胆に一新

仮面や木彫、彫像、金属細工にみる技術の高さと美の感性に、多くの日本人が新鮮な驚きを感じた開館時のアフリカ展示。では、アフリカの現在の実像はどうであるのか。時間を超越したかつての展示に歴史という時間軸を投入すれば、アフリカはどのようにみえるのか。重厚で伝統の重みに満ちた暮らしは、生き生きとしたエネルギーに満ちた世界へと変貌する。



## アフリカの人たちの「顔が見える展示」をめざして

竹沢尚一郎  
たけざわ しょういちろう  
民博 民族文化研究部

専攻は文化人類学、アフリカ史。この十年ほど、西アフリカで考古学の発掘調査に従事してきた。近著に『サバンナの河の民―記憶と語り』のイラストレーター。（世界思想社）

三〇年前に策定された民博の展示方針は、つぎのことにあっただと思われる。モノの用途やコンテキストの説明よりも、モノのもつ力を最大限に発揮させること。そうした方針は当時としてはまったく斬新なものであったし、実際、世界中で高い評価を受けてきた。

### 展示の四つの基本方針

しかし、そうした展示が、毎年アフリカを訪れ、現地の人びとと接してきた私たちに、違和感を生じさせていたのも事実である。私たち民博の六名のアフリカ研究者は、何度も話し合いをもつなかで、新しい展示の基本として以下のことを決めた。

アフリカの人びとの「顔」が見える展示にすること。従来のアフリカ展示が農村と伝統に力点を置いていたのに対し、新しい展示は「都市」

と「現在」を伝えるものにする。ことに当たっては、アフリカのもつ「歴史」の展示が不可欠であること。アフリカの人びとが好きな「華やかさ」を再現した展示にすること。あまりに要求が多すぎたというべきだろうか。ともかく、新しい展示が実現した。

### 六つのセクションで構成

展示は六つのセクションからなっている。「歴史を掘りおこす」「憩う」「働く」「装う」「祈る」「アフリカの現在」である。この六つに、



クバの王の華麗な衣装を展示した「イントロダクション」が加わって、新しいアフリカ展示が構成されている。各セクションのねらいは、それぞれの担当者が説明する。新しいアフリカ展示を見て、どのような感想をもたれたか。是非お聞かせいただきたい。





イントロダクションと歴史のコーナー

# 歴史を

## 掘りおこす

### アフリカの豊かな歴史の実像

竹沢尚一郎

アフリカ展示の最初のセクションは、「歴史を掘りおこす」となっている。なぜアフリカの歴史なのか。いくつかの理由がある。

第一に、アフリカに豊かな歴史があることを示すことである。アフリカの牧畜や土器作りの開始は今から二万年前までさかのぼり、世界でもっとも古い地域のひとつである。

アフリカの作物は日本まで伝えられている

その後、紀元前五千年ころから、アフリカではトーンジエやシコクビエ、ヒョウタン、スイカなどの作物が栽培化され、そのいくつかは日本にまで伝えられている。さらに時代が下って西暦七

世紀以降は、他の大陸との交流のなかでいくつもの王国が誕生した。

ところが、アフリカに豊かな歴史があることはあまり知られていないし、これまで世界のどの博物館でも、歴史の展示が試みられたことはない。その理由は明らかだ。考古学調査の未発達なアフリカ大陸には、過去を展示しようと思ってもモノがないのである。そのため、私たちの展示も写真が多くなっている。

### アフリカの繁栄の終焉

アフリカの歴史展示は、「文明の誕生」「王国と交易」「奴隷貿易」「植民地経験」「解放への闘い」の五つに分かれている。アフリカ各地の岩絵と農業の開始を示した「文明の誕生」につづいて、私自身が西アフリカでおこなっている発掘現場の再現と、サハラ交易、グレートジアンバエを紹介する「王国と交易」の展示がある。



ミシンをかける女性(ガーナ)

このようなアフリカの繁栄は、一六世紀から四百年つづいた「奴隷貿易」と「植民地支配」によって終焉した。とはいえ、アフリカの人びとは支配に忍従するのではなく、それを読み替え、取り込んで、新たな文化形式をつくってきた。そうした創意工夫は、植民地期に作られた展示品にも見られるし、「憩う」や「装う」のセクションでも確認できる。

どの社会であれ、歴史をもたない集団は存在しないし、過去は現在を規定する主要因である。歴史の展示を通じて、アフリカを見る視線に変化があることを、強く願っている。

# 「仮面の森」の今

よしだけんじ

吉田憲司

民博文化資源研究センター

専門は博物館人類学。アフリカを中心に仮面や儀礼、キリスト教独立教会の動向についてのフィールドワークを続ける。一方、博物館・美術館における文化の表象のあり方についての研究を続けている。

新しいアフリカ展示場の「祈る」と題された一画に、私が二五年間フィールド・ワークを進めてきたザンビアのチェワ社会の仮面のコーナーを設けた。そのコーナーには、死者の葬儀、とくに喪明けの儀礼に登場する、ニヤウと呼ばれる仮面の踊り手と、ニヤウ・ヨレンバと呼ばれる動物のかぶり物を展示している。

### 死者の霊を祖先の世界に送る

私は、一九八五年五月、加入儀礼を受けて、チェワの人びとがとくする仮面結社のメンバーとなった。今回展示したカモシカ、ハイエナ、カメのかぶり物は、その加入儀礼の際に教えを受けた技法を用いて、私自身が日本に帰国してから製作したものである。結社のメンバーが製作したものであるから、「複製」ではない。

展示場では、それらのかぶり物が乱舞する様子を、映像でも紹介している。二〇〇〇年に亡くなった、私のフィールド・ワークのアシスタント、モゼス・ピリのために、私自身が喪主となって催した葬儀の際に撮影したものである。世界で、このみんばくでしか見られない映像といつてよい。

死者の霊は、こうした仮面の舞踊を通じて、祖先の世界へ送り届けられ、将来子孫の中に生まれ変わってくるといわれている。

### 二五年間の記録と記憶の凝縮

ニヤウの仮面をかぶることができるのは、結社のメンバーの男性に限られる。また、ニヤウの踊り手が、男たちが仮面をかぶって扮装したものだという事実は、女性や子どもたちには秘密にされている。仮面について、男たちが有している知識、女たちがもっている知識、子どもたちの知識。社会のなかにみられるそうした知識のあり方の違いも、小型のパネルを用いて示している。

チェワの社会を含む南部アフリカでは、今、キリスト教が爆発的な広がりを見せている。そのような動きのなかでも、仮面結社の活動は活発に展開されている。

わずかに二坪ほどのコーナーであるが、「仮面の森」のコーナーは、過去二五年、私がチェワの人びとと過ごしてきた日々の記録と記憶の凝縮されたコーナーである。



「仮面の森」のコーナーに並ぶ、筆者の制作したニヤウ・ヨレンバ

# 民俗文化の栄光と受難

いいたく

飯田卓

民博文化資源研究センター

マダガスカルやモンペイクなど、西インド洋の村落社会で調査研究に従事。マダガスカルでは、生活に用いる道具や工芸品の調査をおこなって、人と自然の関わりの変化を探ることをしている。

「かくれた逸品」の発掘は、日本ならずとも世界中の国々で盛んだ。かざられた地域で作られたり用いられたりしていた道具や食材が、交通や通信の発達によって他の地域でも価値を見いだされる。こうした現象は、グローバル化が加速した現代においていちじるしい。

### アートになった墓碑彫刻

あたらしいアフリカ展示のなかにも、「発掘された逸品」がいくつもあつた。マダガスカルは、死者の霊を慰めたり称えたりするために、ウシ一頭とひきかえに製作されてきた。マダガスカルは、亡くなった家族のために注文するものだった。

あたらしいアフリカ展示に登場したジャック・ジャン氏製作の彫刻(いちばん下)



た。マダガスカルは、亡くなった家族のために注文するものだった。マダガスカルは、死者の霊を慰めたり称えたりするために、ウシ一頭とひきかえに製作されてきた。マダガスカルは、亡くなった家族のために注文するものだった。



盗難にあったアルアル

からは、エフィアインベル氏という無名の作家がただ一人、アルアルを数点出展した。彼は、美術品として彫刻を作った経験はもろろなく、ほとんどの場合は地域の有力者に依頼されてアルアルを作っていた。つまり、地域のなかで地域のために作られ続けていた彫刻が、かくれた逸品として世界中で紹介されたのだ。

### 民俗遺産の盗難撲滅にむけて

エフィアインベル氏は、二〇〇六年に逝去した。彼が美術家を自認していたのかどうかはわからない。しかし、その息子のジャック・ジャン氏は、はつきり自分を美術家だと自認している。あたらしいアフリカ展示では、息子のジャック・ジャン氏が作った彫刻を展示している。彼の仕事は、たんに海外の蒐集家を楽しませるだけではない。海外の愛好家に二定品質のアルアルを提供することは、墓場のアルアルの盗難に歯止めをかけることにもつながっている。



子どもたちは、「ニヤウの踊りはカッコイイ」といい、幼いころからその踊りを真似て遊び、成長する(ザンビア、カリザ村、1993年撮影)



# 装いつ

## 世界経済につながるアフリカの布

みしまていこ  
三島禎子

民博 民族社会研究部

専門は、文化人類学、西アフリカ研究。人はなぜ、なにに支えられて移動するか。商業と宗教を切り口に、世界各地に向かうアフリカ出身の商人をおいかけている。

アフリカの現代生活を彩るものとして誰もが思い浮かべるのは、鮮やかで華やかな色合いの衣服だろう。きらびやかで眩しいほどの陽光のもとでは、原色の混じり合った彩りが冴える。お仕着せの既製服ではない創意にあふれたデザインを着こなす感覚にも、驚きを隠しえない。

### 「アフリカらしさ」の根源

このいかにも「アフリカらしい」布は、じつはヨーロッパ人がアジアからアフリカにもたらしたジャワ更紗が原型になっている。ヨーロッパ人はジャワ更紗のろうけつ染めを模倣したプリント布をアフリカに輸出したのである。

産業革命を経てアフリカに市場を求めたヨー



似て非なる伝統布とプリント布

ロッパ諸国にとって、プリント布は産業の基幹を支える商品であった。すなわち、このプリント布は植民地時代にはじまった南北の不平等な交換を象徴する品であった。一方、二〇世紀中頃から、生産の拠点はヨーロッパからアフリカ、そしてアジア各国にも広がっていった。

### 工夫に満ち溢れた新たな伝統

そもそもアフリカでは、布は社会的な威信を示すために一部の人に利用されるものであった。奢侈品として、交易品や貨幣としても流通した。また、誕生や成人儀礼、婚礼や埋葬など人生の異なった場に応じて、独特な文様の布が創り出されてきた。

今日でも、このような伝統的な布は儀礼や日常生活の場で使われているが、着衣の文化は一般化し、ヨーロッパのスタイルに着想を得た衣服が、新たな「アフリカの」伝統として生み出されている。その独特な意匠には、外来の品を自分たちの文化のなかに取り入れた工夫がみちあふれている。

リニユーアル展示では、装いの文化をおして、現代のアフリカの一端を紹介した。

口ウケツ染め用木製印刷



それは同時に、世界的なつながり、世界経済とアフリカとの歴史、そのつながりの展示でもある。伝統的な布と、その模様を活かしたプリント布、そして斬新なデザインの数々を楽しく見ただけだったらうれしい。

左はダチョウの卵殻、右はキャンディー棒製のビーズ



アフリカ南部のカラハリ砂漠を現地の人と歩いていると、ダチョウの卵に出合うことがある。彼らは、その卵をキャンブに持ち帰り、直径一センチメートルあまりの穴をあけて中身をとりだし、それをといてから煮込んで食べる。残された卵の殻は、かつては水筒にしたこともあるが、細かく砕いて首飾りにする。これが、世界でもっとも古いとされるビーズの素材だ。

# 装いつ

## アフリカン・ビーズへの思い

いけや かずのぶ  
池谷和信

民博 民族社会研究部

専門は地球環境論。アフリカを中心にして人類と地球とのつながりあいの研究。最近、ビーズからみた人類の歴史について考えている。

アフリカには、このほかにも実にユニークなビーズの素材がある。鉄ビーズは、鉄くずをいったん針金状に加工して、それを丸めて穴をつくり切断していく。完成したビーズは紐におして一メートルちかい長さをひとつの単位にしあげる。これは、牧畜を生活の糧にするヒンバの女性とのあいだで一頭の羊と交換される。ヒンバ女性は、このビーズからつくった首や足首の飾りを必ず身につけており、これなしではヒンバとして生きられない。タンザニ



ダチョウの卵の殻をくたく女性

### 人身売買にも介在したビーズ

アフリカには、このほかにも実にユニークなビーズの素材がある。鉄ビーズは、鉄くずをいったん針金状に加工して、それを丸めて穴をつくり切断していく。完成したビーズは紐におして一メートルちかい長さをひとつの単位にしあげる。これは、牧畜を生活の糧にするヒンバの女性とのあいだで一頭の羊と交換される。ヒンバ女性は、このビーズからつくった首や足首の飾りを必ず身につけており、これなしではヒンバとして生きられない。タンザニ

アのハッザの男性の場合は、赤や白からなるキャンディーの棒を長さ二センチメートルほどの破片にして首飾りをつくっている。そのうえ、ヨーロッパでつくられたガラスビーズは、アフリカ各地に歴史的に大きな影響をもたらした。一七世紀にケープタウンを訪れたオランダ人は、地元のコイコイの人びとにガラスビーズを与えるかわりに羊を入手した。その後、ベネチア産ガラスビーズはアフリカ中部で奴隷との交換に使われたといわれる。一九世紀になると、そのビーズは世界で最も多くアフリカ南部で取り引きされていたという。

当時、南アフリカのズールーの人たちは、ビーズの色の組み合わせによって、それぞれが属する地域集団を表現していた。やがて、ビーズの色で愛のメッセージを伝えるという「ラブレター」が発明された。なぜそれほどまでに人びとの心をとらえるのか

アフリカには、このようにアフリカの多様な自然物や人工物が素材として使われる。アフリカン・ビーズは、人びとの暮らしのなかに過去から現在まで深く生きづいてきた。ビーズを題材にして日本とは異なる文化の伝統を知ることができるのだ。

写真屋のバックドロップ(背景画)



ヨーロッパを思わせる大きな絵を背景にして写真を撮るのが、都市に住む若者たちの間では流行っている。彼らも西洋に憧れているのだ。カフエテラスの豊かな機能

夕闇が迫るとカフエテラスの出番だ。ここでは地元産のビールやコーラ、ジュースといった冷たい飲み物が供され、オムレツやスパゲティなど簡単な食事もできる。人びとは三々五々集まってきて、うわさ話からサッカー談議、果ては政治の論評と、遅くまで語り合って昼間の疲れを癒すのである。憩いの場を通して見えてくるのは、私たちと同じように、さまざまな喜びや悩みを抱えながら、人とのつながりのなかに安らぎを見出し、人生を前向きに生きていこうとする庶民の屈託のない姿なのである。

# 憩いつ

## 架空空間に暮らしを再現する

かわぐち ゆきや  
川口幸也

民博 文化資源研究センター

専門はアフリカの同時代美術、展示表象論。美術を通して、アフリカの内外でアフリカがどのように語られているのかをテーマとしている。

今日のアフリカでは、若者を中心に大勢の人間が都市に住んでいる。しかも私たちが実際にアフリカを訪ねるときに、最初に足を踏み入れるのも都市である。都市の生活は現代アフリカを語る上で欠かすことのできない要素なのだ。

ところが、テレビや新聞の報道にせよ、ミュージアムにおける展示にせよ、アフリカが話題になるときは往々にして、そうした都市が映し出すアフリカの同時代性は見落とされがちだ。そこで、都市に住むアフリカの人びとの暮らしをどう展示に取りこむか。これが展示リニユーアルの課題のひとつであった。

### 路地裏を思わせる場

私たちは「憩う」というセクシオンを設け、都市に住む人びとが日々の暮らしの中でどのように憩い、癒しや安らぎを得ているのだろうかという点に注目した。そうして出来上がったのが今回の展示である。



床屋の看板



# 怒れる虎のペルソナ ポン教の聖者、タクラ・メバル

虎は、世界中の神話・民話に最も頻りに登場する動物の一つである。とくに日常生活のなかで虎と接触することが少なくなかった地域では、虎に関するエピソードはじつにバラエティに富んでいる。

中国では、生命力に溢れる虎は「陽」の動物であり、畏敬の念からその名を直接に呼ぶことを避け、「山獣之君」等の名で言い換えられるほどであるが、チベット文化域の民話では、人間との知恵比べに敗北する間抜けな虎がよく登場する。

また中世ヨーロッパの動物寓話集にも虎に関する面白い伝説がある。それによると、虎には水面に映った自分の姿を自分の子どもと思いついでしまう習性があるらしい。獵師たちはこの習性を利用して、丸い鏡を地面に投げて獲物を待ち伏せし、離れがたい思いで鏡を覗き続ける虎を不意打ちにしたという。

私たち日本人は、虎を強さのシンボルとして表象する傾向が強いが、

世界の多くの地域では、虎は許すというところを知らない専制君主であるだけでなく、コミカルで、優しい心をもつ動物としても表象されてきたのである。

## 燃えさかる虎神

現在みんばくで開催中の企画展「チベット・ポン教の神がみ」(二〇〇九年四月二三日〜七月二二日)に、その鑄像と絵画が展示されているタクラ・メバルという聖者は、虎のこうした二面性をよく表している。「タク」は虎、「ラ」は神、「メバル」は燃えさかる火。日本語に訳せば「燃えさかる虎神」となる。

タクラ・メバルは、見る者を圧倒するような怖ろしい姿で表現される(写真1)。誤った思考を焼尽(しょうじん)される炎輪、凶暴さと吉兆(じょうちょう)の徴である虎皮の衣、人間の生首を飾りにしたベルト。右手には教えの象徴である法輪、左手には敵を駆逐する交叉した利剣を持ち、両足でゲシエンと

いう男女の魔を踏みつぶす。右足を曲げ、左足を伸ばした舞の姿は、あらゆる悪に勝利した彼の勇敢さを象徴している。



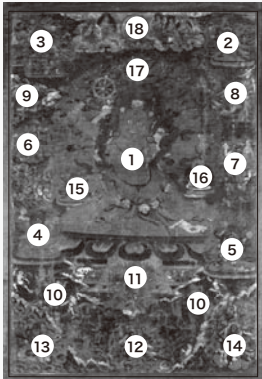
タクラ・メバルの鑄像(写真1)

## 兄殺しの神話

の意味があるのである。タクラ・メバルがこのように怖ろしい姿をとるようになった理由については、次のような伝説がある。その昔、ポン教の聖地タジクにヤンギエル・ヘーギエルポという王がいた。王はときに気まぐれから、家臣に暴力を振るうことがあった。あ



タクラ・メバルを描いた絵画(写真2)



- タクラ・メバルと四つの化身**
1. 利剣を持つ赤い虎神(タクラ・メバル)
  2. 利剣を持つ黒い虎神
  3. 黄金の鎧を身につけた白い虎神
  4. 紅血色の顔をもつ火焰のポン
  5. 紅血色の顔をもつ仕事人
- 下級の神々と悪魔**
6. 香を食する者(乾闥婆)
  7. 夜叉
  8. 龍王
  9. 閻魔
  10. 18人の驕れる者たち
- 教法を守る神々**
11. 虎の顔をした紅い者
  12. 使者・紅黒い空の魔
  13. 崖のツェンという魔
  14. 現象世界の女王
- その他の神々と師僧(ラマ)たち**
15. 秘密の鷹の父母
  16. 明浄なる女神
  17. 言葉の白獅子
  18. 勝者集会

る日、家臣の一人が「来世には、王の息子として生まれ変わります」という遺言を残してこの世を去った。やがて王妃は双子の男児を出産する。一人はダルシャ・デイワ、もう一人はタクラ・メバル。

で人間の肉を喰らうようになった。タクラは人びとの命を救うために、秘法を用いて神がみに助けを求めたが、神がみはいっこうに姿を現さない。するとタクラを不憫(みひん)に思った女神チャンマが姿を顕し、彼に次のような助言を与えた。「汝がダルシャに慈悲の心を抱かない限り、神がみが汝の願いに耳を傾けることはないだろう。だが、本当

に人びとを救いたいなら、汝は慈悲の心だけでなく、人びとを畏怖させるような威儀(いぎ)を身につけなければならない。」女神の言葉をうけ、タクラは忿怒(ふんぬ)の姿でダルシャのもとに到り、深い慈悲の心をもってダルシャを殺害した。この物語は慈悲による救済の論理を説くと同時に、人間の内部には、圧倒的な力によってしか克服するこ

とができない邪悪な闇が存在することを教えているのかもしれない。ポン教徒にとってタクラ・メバルは崇拜の対象であると同時に、自己の内面を映す「鏡」でもある。ポン教僧によれば、この虎神は、瞑想中のヴィジョンや、夢の中にも登場するとされる。

今回の企画展に展示されているタクラ・メバルの鑄像と絵画は、いずれも私たちの心を惹きつける神秘的な魅力に溢れている。この機会にぜひ一度、自分の心を映す「鏡」として、この虎神の姿をじっくり見つけてみてはいかがだろうか。

つまがりしんいち  
津曲真一  
四天王寺大学講師  
専門分野は、宗教学・チベット学。宗教文献の解読作業とフィールド調査を通じ、宗教体験の「本質」に接近する可能性を探っている。





ハノイ、ベトナム革命博物館

# 「革命」という歴史と博物館

ベトナム戦争が終結してまもなく35年を迎えるベトナム。戦争を知らない大人たちが増えるなかで博物館の役割は変わりつつある。自らの歴史を新たなかたちに更新する動きも見える



レジスタンスにもちいられた武器類が並ぶ展示

とが主たる目的だったが、時間を見つけて博物館の展示を見せてもらった。民衆文化からも「革命」が透けて見える。まったく自慢にならないが、私は昔から、先生や友人に「君には政治や権力という視点がない」「君と政治論争してもしょうがない」とことあることにいわれてきた。自ら省みても積極的に否定する根拠も見つからず、なるほど自分は生来非政治的人間なのだとは半ばあきらめ、半ば納得して今日に至っている。そんな私なので、「革命」と聞くだけで妙に緊張し、身構えてしまう。しかし、それも私の考えすぎで、政治性やイデオロギー性をあまり意識せずに展示を見ることができたのである。

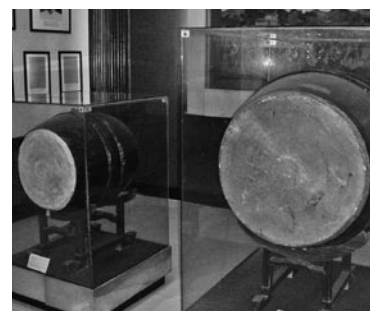


ささはら りょうじ  
民博 民族文化研究部  
専門は民俗学、民俗芸能研究。最近九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

中国・フランス・日本・アメリカといった外部勢力の政治的・軍事的な動きと、さまざまなかたちの抑圧に対抗してきた人びとのレジスタンス、即ち「革命」は、不可避かつ重要な問題である。つまり「革命」は、ある意味ベトナムの歴史だということを、私は展示をとおして理解することができた。しかもそこでは、ベトナムの人びとの間で用

先日、ベトナムのハノイにあるベトナム革命博物館を訪れた。このスタッフの一人は、民博がJICAとの協力で、世界各地の博物館スタッフを招いて毎年実施している国際セミナー（集団研修 博物館学集中コース）に昨年参加している。私のハノイ訪問は、その人の協力を得て、ベトナムの音楽・芸能を巡ってベトナムの研究者と意見交換するこ

命」と聞くだけで妙に緊張し、身構えてしまう。しかし、それも私の考えすぎで、政治性やイデオロギー性をあまり意識せずに展示を見ることができたのである。ベトナムという国の成立の経緯を考えると、



展示では武器類や写真と並んで太鼓も並ぶ



ベトナム革命博物館正面入口

多様な歴史認識が響きあう世界の実現に向けて  
この博物館は数年後、近くにあるベトナム歴史博物館と統合され、ハノイ郊外に新たにできる大規模な国立歴史博物館となる。私を案内して

いられてきた太鼓やゴングや角笛が、レジスタンスの連絡や警戒用の道具として展示され、「革命」という歴史が一部の階層に止まらない、民衆文化次元での広がりも有していたことがうかがえて感慨深かった。

くれたスタッフも、近々その開設準備室に異動するという。そうしたベトナム革命博物館の発展的解消ともいべき事態は、穿った見方をすれば、時代や社会の変化に呼応し、ベトナムが自らの歴史を、自ら新たなかたちに更新する動きといえなくもない。とすれば、それも必ずしも否定的にのみ捉える必要はなくなる。そのスタッフは個人的な見解と断りつつ、せっかくならJICAの研修で民博と縁ができたのだから、新しい歴史博物館づくりでも民博と連携・

協力できればと話していた。さまざまな面で世界規模の一元化の進行の弊害が顕在化している今だからこそ、それぞれの国や地域による多様な歴史認識が賑やかに響きあい、対話や議論が活発に練り広げられる状況の構築が重要となる。そんなポリフォニック（多声的）な歴史の実現の一翼を、世界各地の博物館とともに民博が担うことができればさぞかし愉快だろうというのが、ハノイで抱いた私の個人的見解である。

## 表紙モノ語り

### クバ王国の摂政の衣装

民族：クバ 国名：コンゴ  
1991年収集、H0179278ほか

吉田 憲司

民博 文化資源研究センター

コンゴ民主共和国の中央部、コンゴ川の上流域に位置するクバの王国では、古くからラファイア椰子の繊維を用いて布を織り、刺繍布やアップリケ布が制作されてきた。とりわけ、王やその親族、貴族たちは、男女を問わず、さまざまな儀礼の際にこれらの布を組み合わせた豪華な衣装一式を身にまとう。さらに、それらの人びとは、死に際して、その人物がそそえた衣装の中でも最も豪華な衣装を身に付けて埋葬される。

ここに示したのは、クバ王国の摂政の一人が整えた衣装の一式である。一九九一年、クバの王宮との直接のやりとりの結果、みんなのコレクションとなったものである。クバの刺繍布は、ピロッドを彷彿とさせる質感をもつことから、日本では草ピロッドの名で知られてきた。平織りのラファイアの布に、裏から同じラファイアの繊維の糸を刺し、表にわずかのたわみを残して裏へ差し戻し、あとから表に出た糸を切りそろえて毛羽状にしたものである。一方、ラファイアの布にアップリケを施す技法は、もともとは擦り切れた部分や穴を伏せるために始められたものであるが、後に、布の装飾の方法として広がっていった。

カでは、衣装は、身を守るものである以上に、それが身につけられる機会の神聖さや、それを身につける人物の社会的地位を示すものとなってきたのである。





特別展

千家十職

「茶の湯のものづくりと世界のわざ」

会期 六月二日(火)まで  
会場 特別展示場

企画展

「ナシ族画家が描く生活世界—雲南省西北部ではぐくまれた絵心」

会期 六月二三日(火)まで  
会場 常設展示場内  
\*研究者によるギャラリートークを開催します。

「チベット ポン教の神がみ」

会期 七月二日(火)まで  
会場 常設展示場内

「国際研究フォーラム」  
「二世紀を生きるアーミッシュ—日々の助け合いから国際協力へ—」

アーミッシュの人びとが、何を幸福であると考え、それを実現するためのどのようにコミュニケーション・デザインをおこなってきたのかについて検討します。自らも保守的なグループのメンバーであるステファン・スコット氏を迎え、アーミッシュの人びとのライフスタイルについて、一般参加者もまじえ議論します。

日時 六月二日(日)  
一三時三〇分～一七時  
(開場一三時)

会場 講堂(定員四五〇名)  
参加費 無料・先着順  
お問い合わせ 鈴木七美研究室  
電話 〇六六七八八二九九  
(平日九時～一七時)

音楽の祭日二〇〇九

一九八二年にフランスで、夏至の日にみんなで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。それは、今、世界各地に広がっています。日本でも、その趣旨に賛同する人びとの呼びかけで、二〇〇二年から「音楽の祭日」がスタートしました。みんなくも、七年連続して世界のさまざまな楽器を使った音楽で「音楽の祭日」を祝います。

日時 六月二日(日)  
一〇時三〇分～一六時三〇分  
会場 特別展示場一階等  
入場料 無料  
お問い合わせ 情報企画課情報

企画係  
電話 〇六六七八八二九九  
(平日九時～一七時)

「ひらめき☆ときめきサイエンス」  
よつこそ大学の研究室へ〜KENHI〜

「環境問題を考える底力を養おう」  
「世界の人の暮らしと環境」  
本館展示場等を利用し、世界の諸地域における環境に対する考え方、自然資源を巧みに利用する知恵や技術をお伝えします。高校生のみなさん、これを機会に、環境資源コーディネーターへの一歩を踏み出しましょうか？

日時 七月二四日(金)一三時～一七時(受付一二時三〇分)  
対象 高校生  
会場 セミナー室等(定員一五名)  
参加費 無料・事前申し込み制  
(お申し込み多数の場合は、抽選となります)  
お申し込み・詳細のお問い合わせ

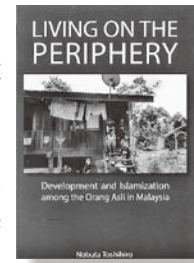
わせは、研究協力課研究協力係まで。  
電話 〇六六七八八二九九  
(平日九時～一七時)

●無料観覧日のお知らせ

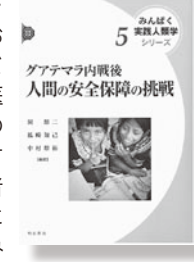
六月二日(日)は、音楽の祭日のため常設展を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園を通行される場合は入園料が必要です。  
\*詳細及びお申し込みについては、みんなくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■信田 敏宏 著  
『LIVING ON THE PERIPHERY』  
Center for Orang Asli Concerns  
定価：1,200円(税込)  
2008年刊行の同タイトル本をマレーシアで出版。写真94枚を追加し、装丁を新たにした400頁におよぶ著作。開発とイスラーム化の圧力の下で生きるマレーシア先住民の姿を描く。



■関 雄二、狐崎 知己、中村 雄祐 編著  
『グアテマラ内戦後—人間の安全保障の挑戦—』  
(みんなく実践人類学シリーズ5)  
明石書店 定価：5,250円(税込)  
中米グアテマラでは30年以上にわたり内戦が続いた。ポスト・ジェノサイド社会において、暴力や追放などの「恐怖」や、貧困・医療や教育機会などの「欠乏」をどう克服するのか。文化人類学者が社会復興にいかに関与できるかを試みた実践の記録。



■国立民族学博物館 編  
『チベット ポン教の神がみ』  
千里文化財団 定価：1,680円(税込)  
企画展「チベット ポン教の神がみ」関連書籍。ボン教とは、仏教が導入され主流となる以前から、チベットで信仰されてきた宗教です。本書は、ボン教が築きあげてきた宗教的宇宙の一部を、詳細な解説と豊富なカラー図版資料によって紹介します。チベットの基層文化をより深く理解するための手助けとなる画期的な一冊です。



■関根康正 編  
『ストリートの人類学 上巻・下巻』  
(国立民族学博物館調査報告No.80、81)  
■『国立民族学博物館研究報告』  
2009-33巻2号、3号

みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13:30~15:00 (13:00開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第373回 6月20日(土)  
「辺境のキリスト教美術をたずねて—南米イエズス会ミッシヨンの聖堂装飾」

講師 齋藤 晃(先端人類科学研究部准教授)  
スペイン統治時代、南米の辺境地域にイエズス会が建設したキリスト教聖堂の現状を紹介します。また、イエズス会の宣教師と先住民が、感覚に訴える美術の力をめぐって交渉を繰り返したことについてお話しします。



第374回 7月18日(土)  
「グローバル化の中の漢族婚礼」

講師 韓 敏(民族社会研究部准教授)  
グローバル化によって世界が均一な文化に覆われているようでありながら、実際に人びとはローカルな環境のなかでグローバルな文化を再編成しつつ、自分らしさ、地域性、民族性、ルーツと伝統などを再認識し、再構築していこうとしています。多元的に展開された漢族の婚礼を通して、現代中国の庶民の生活と文化変容を考えてみます。



友の会

友の会講演会 会場●国立民族学博物館 第5セミナー室  
定員●96名(先着順、申込不要、当日会員証をご提示ください)

第373回 7月4日(土)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
シリーズ「先住民のいま」①  
狩猟採集は「先住民」の権利か?—アフリカにて  
講師 池谷和信(民族社会研究部教授)  
南部アフリカの先住民サン(ブッシュマン)の人びとにとって狩猟採集生活は当然の権利と思われがちですが、それは彼らが本当に望んでいる事でしょうか?これまでサンが関わった「先住民の権利」の裁判は、欧米のNGO団体など外部の働きかけ無しにはあり得ませんでした。世界的なネットワークのなかですむ先住民運動と、当事者の思惑について解説します。

第374回 8月1日(土)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
シリーズ「先住民のいま」②  
ダレがダレを「先住民」とよぶ?—東南アジアにて  
講師 信田敏宏(研究戦略センター准教授)  
東南アジアでは、「先住」民族と「後」からやってきた民族をはっきりとわけることはできません。しかし実際には「先住民政策」がとられ、国連先住民権利宣言を批准している国もあります。国家や国際団体が定める「先住民」と、近年急にそう呼ばれる事になった人びととの意識のズレや、森林開発の場面で唱えられる「先住民保護」の虚と実を語ります。

第75回 民族学研修の旅  
ペルー プレ・インカの遺跡と人びとの暮らし  
期間●10月8日(木)~22日(木)15日間  
さまざまな文化・時代の遺跡をめぐりながら、アンデス文明の豊かさを実感する旅です。マチュピチュの麓にあるホテルや、アマゾンのジャングル・ロジに宿泊します。お申込は左記まで。

国立民族学博物館 友の会  
電話 06-6877-8893  
ファックス 06-6878-3716  
電話でのお問い合わせは  
月曜~金曜日午前9時から17時まで  
にお願いします。  
http://www.senri-f.or.jp/  
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

トンパ画を特別販売  
企画展「ナシ族画家が描く生活世界、雲南省西北部ではぐくまれた絵心」の開催にあわせ、展示でも紹介されているナシ族画家、張雲嶺さんの作品を特別に販売しています。展示作品と同じ



ナシ族の老猟師

く、ナシ族伝統の手すき用紙、トンパ紙に描かれています。この紙は、独特の光沢があり、和紙よりも硬く、保存処理を施さなくても数百年は持つといわれています。  
「紅色の山」、「ナシ族の老猟師」(各税込21,000円)などの作品はいずれも縦横22cm、ご家庭で飾っていたり、使いやすいサイズも魅力的です。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ  
電話 06-6876-3112  
ファックス 06-6876-0875  
水曜日定休  
ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/  
E-mail shop@senri-f.or.jp



# 南の島の楽観主義

二〇〇九年一月、史上最大規模の洪水がフィジーを襲った。一月九日の早朝、同地に到着した私は、調査地に向かう前に、空港近くのなじみの村で荷を下ろした。

一日だけの挨拶のつもりが、同日の昼過ぎから激しさを増した雨は、翌日は大雨となり、バスの運行すらままならない状況となった。携帯電話を持っていく友人に頼んで、タクシー会社と連絡を取ると、市内は水浸しになっているため本日は休業だと告げられた。

「ノリオ、後できることはカヴァを飲むだけだ」という友人の声に誘われて、やむを得ず翌日に出発を延期し、コショウ科の植物の根から作る伝統的飲料であるカヴァの杯を交わしつつ、雑談に花を咲かせて終日過ごすこととなった。

## ●非常事態宣言の発令

ところが大方の人の予想に反して、翌日になると大雨は本格化し、さらにそれが引き起こした洪水のため、首都に向かうまでに通過する幹線道路沿いのふたつの都市はどちらも水没しているとのラジオ情報が伝えられた。一月一日には、ヴィティレヴ島の西側に非常事態宣言が告げら

れ、同地域にある都市バ、ナンデイ、シガトカの夜間外出は制限された。私が滞在していた村でも、海よりの側は水没し、村全体の水道水の供給が制限され、十分にシャワーを浴びることさえできなかった。

予定通りに調査を進められないことに苛立ちながらも、のんびりとカヴァを飲んで雑談するだけの無為な時間が嫌いではない(むしろ好き)。私は、偶然与えられた休息をあきらめの境地で受け入れることにした。

## ●不幸を笑い話にする能力

まわりのフィジー人の洪水に対する反応も興味深かった。熱心なキリスト教徒である友人のひとりには、眼前の出来事を聖書のノアの箱船などの記述と対比し興奮しながら、自宅が水没から免れた村落内ではまれな家であったことを誇らしげに述べた。

またある中年男性は、フィジー史上四度目となる二〇〇六年のクーデタ以降、軍事政権が支配しているフィジーの歴史と現状を当てこすり、「行いが悪

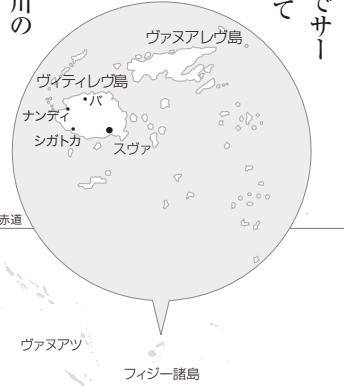


洪水でテレビを運ぶ

いからな」と苦笑していた。しかし、なによりも私を感嘆させたのは、家財の多くを失うという不幸に直面しながらも、すぐさま笑い話にしてしまう人びとのたくましさである。

子供たちは、水没した広場でサーフィンを始めると遊び回っていた。大人も、さつそく洪水の体験を語りの素材として、おもしろおかしいストーリーを作り上げた。たとえば、村に住むある漁師は村が水没したとき昼寝をしていた。

寝ぼけて家の床をまさぐると川の水が流れこんでいる。そこで、「鉦と水中眼鏡を持ってこい！」と、普段漁に出かけるときのように奥さんに叫び、ビジネスチャンスとばかりに村の中で漁を始めたという。私がどれだけ政情が悪化してもフィジーの未来に期待を抱きたくなくなるのは、こうした楽観主義が人びとの生き方のなかに根強く息づいているからだ。今回の洪水の体験から再確認した。



丹羽典生  
民博 研究戦略センター  
専攻は社会人類学、オセアニア地域研究。オセアニアにおける紛争や、フィジーの先住民を対象とする社会運動、開発と伝統文化の問題について研究している。

# 語り合い 寄り添う つながり

人は交流を重ね、語り合うことで理解を深めてゆく。情報交換することで問題解消につながることもあれば、寄り添う人びとにとってはそのつながりが心の拠り所となることもある。

そんなつながりが、みんなの研究フォーラムをきっかけに生まれた。昨二〇〇八年一月二三日、東京の国連大学で開催した「無国籍者からみた世界——現代社会における国籍の再検討」と題するフォーラムだ。

## ●無国籍の人たちの肉声が響く

フォーラムには、定員二二〇人をはるかに超える参加者が集まり、折りたたみ椅子を入れても立ち見者がいたほどで、企画者としてはまさにうれしい悲鳴であった。

このフォーラムへの関心が高かったのは、第一に時期相応なテーマだったという理由がある。婚姻関係のない日本人男性とフィリピン人女性とのあいだに生まれた子が、非嫡出子という理由で日本国籍が与えられず無国籍状態であった。折しも昨年六月、最高裁は違憲判決を下し、日本政府としても婚外子差別をなくすべく国籍法改正に踏み切ったときであった。

参加者の関心を集めたもうひとつの理由には、当事者の語りがあった。それは会議後に集めたアンケートに「無国籍の人の肉声が心に響いた」という感想が多数寄せられたことからもわかる。

じつは、パネリストとして自分の経験を話すことを依頼した無国籍の人のなかには、「人前には出たくありません」と断ってきた人もいた。自分の辛い経験を話すことはそう簡単なことではないからだ。しかし、企画の際、私が当事者の語りによってわった理由は、なによりも彼ら自身が人に話すことで自分の心の奥底にあるコンプレックスや、もやもやし

たもの乗り越えてほしいと思ったからだ。

## ●無国籍ネットワークが発足

フォーラムが終わったあと、パネリストとして参加してくださった無国籍の人たちがみな笑顔であったのが印象的だった。他人に自分の気持ちを伝えられること、そして思いを分かちあえる人と集い交流できたことに喜びを感じたのだった。これまでも無国籍の人は、そんなつながりをもつことができないうからだった。このフォーラムがきっかけとな

\*詳しくは <http://www.stateless-network.com/> をご覧ください

ドキュメンタリー『無国籍 わたしの国はどこですか』を制作したディレクターを囲んで行われた第1回「すてねとカフェ(無国籍ネットワーク・カフェ)」



チェンティン 陳天璽  
民博 民族社会研究部  
移民や無国籍者に注目している。移民や無国籍者をつじ、国家とはなにか、国籍とはなにかについて考察している。最近、パスポートが人びとに与える影響にも着目している。



多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

# 在日をつなぐ、祖国をつなぐ、

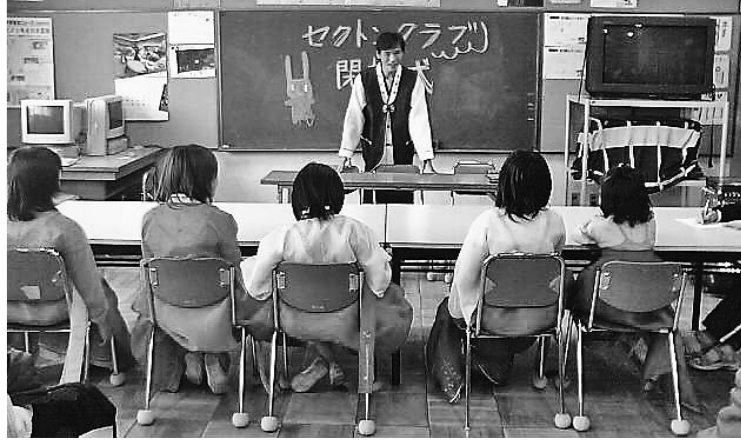
## 世界をつなぐ

### 特定非営利活動法人コリアNGOセンター

来年二〇一〇年夏、日本が朝鮮を植民地化した「韓国併合」から二〇〇周年をむかえる。しかし、日本でコリア(朝鮮韓国)といえは、キムチ・焼肉・ヨン様……というように認識に偏りがある。コリアNGOセンターは在日・祖国・世界につらなるセンターとして、さまざまな課題に取り組んでいる。

#### 三つの団体が得意分野を 三角形でむすんで誕生

コリアNGOセンターは、在日コリアンがもつとも多く暮らす大阪府生野区を拠点として二〇〇年以上活動



守口市立錦小学校  
民族学級の開講式



子どもたち対象の民族打楽器の講習会



国連人権委員会特別報告者のドゥドゥ・ディエンさんの朝鮮学校視察

がら、「松田(宋さんの日本名)の本籍はここやな」と言ったことが忘れられない。その一方、高校時代は伊勢市内の高校の野球部で活躍したが、ランニングで伊勢神社に行けば参拝もした。違和感はなかった。一九八〇年に京都の同志社大学に進学し、学生寮に入ったあたりから宋悟さんの人生は大きく変わる。ち

してきた「在日韓国民主人権協議会」、「民族教育文化センター」、「ワシントンコリアフェスティバル実行委員会」の三団体が二〇〇四年三月に統合し、得意分野を三角形でむすぶかたちで、新たな在日コリアンNGOとして設立された。

「在日韓国民主人権協議会」は、在日コリアンをはじめとする在日外国人の人権保障、それに日韓間の市民とNGOの交流協力事業をになつてきた。

「民族教育文化センター」は、在日コリアンの子どもたちの民族的アイデンティティと自尊感情を育むことを目指し、大阪の公立学校における民族学級の制度保障に取り組む当事者団体として中心的な役割を果たしていた。

「ワシントンコリアフェスティバル実行委員会」は、南北コリアの統一を掲げにされ、日本のマスコミも連日取り上げた。民主主義のために闘う祖国の若者の姿に共感し、在日コリアンの学生団体に加入し、活動にのめりこんでいった。それまで学んだことのなかった祖国のことはや歴史を初めて学んだ。何もかもが新鮮だった。知ること、伝えることの大切さも知った。

#### 四つのミッション

戦後の在日コリアン社会は分裂のくりかえしといってもよかった。祖国や在日の歴史から、まとまることの大切さを学んだ宋悟さんは、コリアNGOセンターの運営方針について、メンバーが互いに自立した活動家として尊重しあいつつ、分担の大枠を決めて活動を進めるスタイルをとった。上意下達のピラミッド形ではなく、平らな三角形のように。

コリアNGOセンターはミッション(使命)として、次の四つを掲げている。

- 一、在日コリアンの民族教育権の確立と多民族・多文化共生社会の実現。
- 二、在日コリアン社会の豊かな社会基盤の創造と東アジアのコリアン・ネットワークの構築。
- 三、南北コリア・日本間の市民、

たフェスティバルを積極的にを行い、九〇年代には「東アジア共同体」のビジョンを市民の立場から訴えてきた。財政は、約二五〇人の会員による会費のほか、自主的な事業として民族楽器や衣装・教材などの物品販売、それに生野コリアタウンへのフイールドワークなどの人権研修プログラムの実施による収益によってまかなっている。あくまでも経済的にも自立することが原則であり、目標である。

#### 祖国のことばと歴史を 新鮮に感じた宋悟さん

代表理事の宋悟さんは三重県鳥羽市の出身。先祖の宋氏は日本の植民地時代、全羅道羅州で地方官吏をしていたが、朝鮮総督府の言うことを聞かず、警察に連れて行かれて二度と帰ってこなかったという。祖父た大事にしたいと思っている。

当初は統合体としての活動はあまり理解されなかったが、今日では地道な活動により、コリアンだけでなく、多数派社会にも親しまれはじめている。講演依頼、イベントへの招待、コリアンタウンの案内依頼など、多数派の人たちにとっても在日コリアン・ワールドへのメインゲートとなりつつあるようだ。

四、南北コリアの統一と「東アジア共同体」形成へ寄与。

メンバーがこまめに動きまわることによつて、さまざまな情報がNGOセンターに入ってくる。人的ネットワークがつかみかさなることにより、さらに活動に厚みが増すという相乗効果もみられた。このことを大事にしたいと思っている。

当初は統合体としての活動はあまり理解されなかったが、今日では地道な活動により、コリアンだけでなく、多数派社会にも親しまれはじめている。講演依頼、イベントへの招待、コリアンタウンの案内依頼など、多数派の人たちにとっても在日コリアン・ワールドへのメインゲートとなりつつあるようだ。

#### ミッションを具現化する フェスティバル

コリアNGOセンターの掲げる四つのミッションを具現化するうえで、フェスティバルは大きく役立っている。ワシントンコリアフェスティバルは、一九八五年八月、ワシントン(統一)への新しいアプローチ、新しいビジョンを創造しようとはじめられ、今年秋の開催で二五回を迎える。コリアンの力を結集しようとするコリアンNGOセンターの理念の歴史は、

藤井幸之助  
神戸女学院大学非常勤講師  
在日朝鮮人論(言語・教育・社会・文化)、民族まつり・マダン研究。近年は京阪神の朝鮮人コミュニティの形成と消滅について調べる。共著書に「多民族くニホン」、「デカシヨのまちのアリラン」など。



コリアNGOセンター代表理事の宋悟さん

ち兄弟は一族の難を逃れるために、ばらばらに逃げた。祖父は日本に渡った。父は日本で生まれ、家族を養うためにありとあらゆる仕事についてた。儒教思想のかたまりのようなアボデで、子どもの頃は家族旅行も外食もしたことはなかった。そんなものだと思っていた。

物心ついたころから朝鮮人という自覚があった。小学校五年のとき、担任の教師が黒板に張った日本付近の地図で韓国の釜山あたりを指しな



第24回「ワシントンフェスティバル2008」のフィナーレで恒例の「ハナ」コールを行う出演者たち

すでにそのころからはじまっていたのだ。二〇〇四年からは大阪城公園太陽の広場を会場にし、毎回、多くの観客を集めて大阪の秋の風物詩ともなりつつある。

今後の課題としては、運営マネージメントの問題がある。組織の存続だけでなく、多数派といかに共存する社会を築いていくのか。「戦略的方向とともに、求心力の水準が問われています」と宋悟さん。

地に足のついた地道な取り組みと新たな発想によるコリアンNGOセンターの活動に、期待したい。



# 人とともに生きてきた 特別天然記念物 〈イリオモテヤマネコ〉

森林に潜むように生き、その生態は未だ不明な点が多い特別天然記念物イリオモテヤマネコ。学術的「発見」以来、その保護をめぐる議論はつきない。とりわけ、島人達とともに生きてきた長い歴史を抜きにしてそれらを語ることはできない



提供・池田米蔵氏

の足跡が乱れており、ヤマネコに食いちぎられたのは明白だった。血のあとが生々しく、まだどこか近くで見えていたのかも知れない。しかし、薄暗い西表島の森林でじつと動かず潜んでいるヤマネコの姿を確認するのは非常に困難である。また、そのようなとき、目だけが不気味に光って見えるらしく、島人達はヤマネコを「ヤマピカリヤ」<sup>①</sup>とも呼んできた。山でヤマネコを見ると、良くなことが起こる前兆なので猫をやめ、山から戻るといふ言い伝えもあったが、その背景には滅多に見ること



マングローブ林でみかけたヤマネコの足跡

## ヤマネコへの畏怖とゆるやかな共存関係

これまで、そんなヤマネコを二回見たことがある。一回目は居候先の農作業のお手伝いで田んぼに行った

できない不気味な生きものへの畏怖があったのであろう。

## 人が大事かヤマネコが大事かという論争

イリオモテヤマネコが学術的に「発見」されたのは一九六五年のことであるが、もちろん、島の住民達はそれ以前からその存在を知っていた。ニワトリを食べにやってくるヤ



前方の道路上には、ヤマネコを警戒させるため、音を立てて車が走るよう凹凸加工が施されている(提供・細将貴氏)

## 守るべき「野生」とはどういうものか

また、畏による誤捕獲がヤマネコの生存を脅かすものとされ、保護論の矛先は住民生業であるイノシシ猟にまで向けられた。もともと、それは実証的な論拠に基づいたものでない。また、畏の反応度を調整するなど、ヤマネコが掛からないようにすることは技術的に可能だとも猟師は語る。そもそも、ヤマネコは、

マネコを、魚突き用の鉾を持って何人かで追い回したことがある人もいる。だからといって、害獣として積極的に駆除するわけでもなければ、利用目的で狩猟してきたわけでもなかった。ゆるやかに関わりながら同じ島でともに生きてきたのである。ところが、世界中にイリオモテヤマネコの名が知れ渡るにつれ、そのような関係は様相を変えた。「貴重な」ヤマネコの住む島として、横断道路の建設など開発行為は止められ、「ヤマネコを守るため住民は島を出るべし」といった発言をおこなう海外の動物学者もいた。その結果は「人かヤマネコか」という二者択一的で極端な議論にまで発展した。



(提供・池田米蔵氏)

## イリオモテヤマネコ

*Felis iriomotensis* もしくは *Felis bengalensis iriomotensis* 食肉目ネコ科で、ベンガルヤマネコの一亜種とする説もある。西表島にのみ生息分布している。成体オスで体長50~60cm、体重4kg程である。繁殖期は主に2~4月で、繁殖期以外は雄雌関係なく基本的に単独で行動する。主に夜間に活動し、巧みな木登りや泳ぎが観察されている。クマネズミなどの小型哺乳類の他、爬虫類、鳥類、河川の魚類や甲殻類などを捕食していることが知られている。国指定特別天然記念物で、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧IB類。

ニワトリを襲い古くから集落に現れていたし、五百年以上の歴史を有する島の水田は、鳥類や小動物を育み、ヤマネコの餌場でありつづけた。そのような住民の暮らしとヤマネコとの関係が明らかにされつつあり、近年では、かつてのように議論が先鋭化することも少ない。また、ロードキルやネコエイズ対策など、ヤマネコの生存を脅かすリスクを減らすための環境づくりについても一定の理解が住民から得られているように思う。しかし、イリオモテヤマネコの「発見」を端緒として起こった保護論争が投げかけた問いは大きい。それは、守るべき「野生」というものは一体何なのかというものであったのである。

車道わきの看板、下に記された番号はヤマネコの目撃場所の報告に役立つ(提供・細将貴氏)



えびはら いっぺい  
蛸原 一平  
民博 外来研究員

生態人類学・環境人類学を専攻。西表島での狩猟活動と捕獲個体の調査をはじめ、琉球列島におけるイノシシ猟の歴史・文化にかかわる地域研究をおこなっている。



# 歳時 世相篇 15

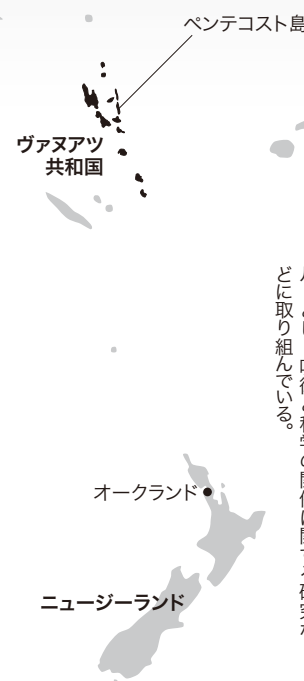
のっけから私事で恐縮だが、私は高いところが大の苦手である。建物で言えば、四階くらいから上の高さになるとダメである。怖くて窓の近くに寄れない。文化人類学者という仕事柄、飛行機に乗る機会が多いが、席をとるのは、もちろん窓側ではなく通路側だ。

## ニュージーランド発祥のバンジージャンプの原型

そんな高所恐怖症の私にとって、決して真似したくない、いや真似できない人たちがいる。バンジージャンプを楽しむ人たちが。体にロープをとりつけ、目もくらむような高さから真つ逆さまに飛び降りるバンジージャンプ。本場のニュージーランドなどには、一〇〇メートルを超える高さのものもあり、中心都市オークランドのランドマークとなっ

## ヴァヌアツのナゴル 豊作を祈願する 命がけの農耕儀礼

南太平洋の島国、ヴァヌアツ共和国の人びとが、天然の植物のロープを足首に巻き付けて高いやぐらから飛び降りる伝統儀礼ナゴル。それはやがてバンジージャンプへと発展し、ヴァヌアツでも今や観光のめだまの一つに



しらかわ ちひろ  
白川千尋

民博 先端人類科学研究部

ヴァヌアツを主なフィールドとして、伝統と近代の関係に関する人びとの認識などについて研究してきた。最近では東南アジア大陸部もフィールドとし、呪術と科学の関係に関する研究などに取り組んでいる。

メートルを超えるようなところから飛び降りることはおろか、ジャンプ台にさえ恐ろしくてとでもたどりつけないだろう。

バンジージャンプは、一九八〇年代にニュージーランド人のある男性が始めたものとされる。ただし、彼が、無から有を創り出すようにして、まったく独自に考え出したというわけではない。モデルとなったものがあるのだ。南太平洋の島国ヴァヌアツ

ツのペンテコスト島でおこなわれているナゴルという伝統的な儀礼が、それである。

ナゴル儀礼では、高さ数十メートルにおよぶ木製のやぐらから、足首にロープを結びつけた男性たちが次々と弧を描くようにして真つ逆さまに飛び降りてゆく。ロープは男性たちが地面に激突する寸前に伸びきり、彼らの体と命を守る。渓谷を流れる川などに向かって飛び降りるバ



ナゴル儀礼でやぐらから飛び降りようとしている男性(撮影・井上恭子)

ンジージャンプとは違い、男性たちが飛び降りる先は、むき出しの地面である。彼らの文字どおりの命綱となるロープは、バンジージャンプで使われているような、そうとうの負荷が加わっても絶対に切れることがないように設計された人工的なものではなく、天然の蔓性植物である。

## 死をともしなう通過儀礼 という誤解

男性たちは、自分の身長と体重、飛び降りる高さなどを考慮しながら飛び降りるときにロープとして使う蔓性植物を自らの手で選り出し、長

さの調節をおこなう。ナゴル儀礼は例年五月頃におこなわれるが、この時期に植物の乾燥度と張力は、命綱としての役割を果たすうえでもっとも適した状態になるという。逆に言えば、ほかの時期に使った場合には、ロープが切れてしまう危険性が高まるわけだ。実際、過去にはそれが現実のものとなり、事故が起きたこともある。

ヴァヌアツがまだイギリスとフランスの植民地だった一九七二年、ヴァヌアツを訪問したイギリスのエリザベス女王のために儀礼が行われた。しかし、その最中にロープが切れ、女王の目前で一人の若者が墜死

してしまったのである。この痛ましい事故が起きたのは、女王の訪問にあわせて、時期外れの二月に儀礼が行われたためであるとされている。こうした出来事の記憶もあいまって、儀礼では飛び降りる男性たちの勇敢さに注目が集まる。そのためか、日本などでは、ナゴル儀礼はしばしば大人の男性になるための通過儀礼として紹介されてきた。儀礼に臨む若者たちは、死の危険に果敢に立ち向かい、見事にそれを乗り越えることで、晴れて大人の仲間入りを果たすというわけである。

た姿などで飛び降りていた。じつはこの儀礼は、その内容の壮さゆえに一九六〇年代頃から観光の対象となり、現在では多くの外国人観光客が集まる人気イベントと化している。こうしたなかで、儀礼の担い手たちは、観光客によりアピールするようにTシャツなどを着るのをやめ、伝統的な出で立ちに替えることにしたのかもしれない。

あるいは、一九八〇年の独立に前後して、ヴァヌアツでは伝統文化を積極的に評価し、その本来の姿を守ってゆこうとする機運が高まったが、儀礼の担い手たちもまたこうした動向をうけて、儀礼をより伝統的な形に戻そうとしたのかもしれない。

## 観光化が儀礼を 伝統の姿に戻す

ところで、ナゴル儀礼でやぐらから飛び降りる男性たちは、いずれもペニスを包むペニスラッパーと装身具だけしか身につけていない。しかし、一九五〇年代頃の儀礼では、男性たちはそうした伝統的な出で立ちではなく、Tシャツにズボンをはい

五月前後は、ちょうどペンテコスト島の季節が雨期から乾期へと移行変わる時期でもある。島の人がとに

とって、ナゴル儀礼はおそらく季節の変化を彩る風物詩であり続けてきたのだろう。しかし、それは決して変わることなく続いてきたのではない。儀礼をとりまく社会の動きに応じて変化しながら、受け継がれてきたのである。



# スリランカ人の布袋さま

「信仰」と「宗教対立」が二世紀を激動させているというのに、異国の神さまとおぼしき塑像に招福招財を願うスリランカの人びと。お腹をつき出したその風貌が受けるのか、それとも幾多の宗教が混在・共存するスリランカならではの現象なのか



タミル人経営の商店、祭壇に祀られている

数年ぶりに再訪したスリランカ。古都キャンデイの街角に風変わりな塑像をみつけた。日本でいうところの「布袋さま」の容貌である。これが象頭のヒンドゥ神、ガネーシヤ像などと並んで売られている様は、ちょっと見慣れぬ光景である。

この塑像、一度気になるとそこかしこで目につく。老舗仏具店の陳列棚にまぎれ込んでいるかと思えば、ふと覗いた宝石店では灯明を灯して祀られている。宿の受付カウンターにもまんまと鎮座している。さて、これはなんだ？ 少し追いかけてみれば……。

## 風水ブームを横目に、塑像は勝手に歩き出した

塑像が市中に広く出回り始めたのは、ここ一、二年のことである。多くは中国製の大量生産品で、インドやタイを経由して輸入されている。



コロombo郊外の塑像製作所。既に国産品も

体に関わるまことしやかな縁起の吹聴を差し控えているくらいがある。仏教、ヒンドゥ教、イスラム教、キリスト教が混在するスリランカにおいて、特定の宗教色がちらつければ前もって市場を狭めてしまう。おのずと宣伝も「招福招財」の一面倒となる。それが逆に、塑像の正体を受け取り手の人びとに委ねる状況を作り出している。



風水専門店。塑像は「ひとり歩き」して……

「俺はバヒラワと信じるね」とはあるシンハラ人仏教徒による見立てだ。バヒラワとは地下の財宝を司る神（ないし夜叉）である。つき出たお腹がバヒラワ像に似ているというのがその理由だ。「ヒンドゥ神のクペーラ（美しい）とタミル人ヒンドゥ教徒の解釈を受け入れたのはまた別のシンハラ人である。これも財宝の神であるタミル人曰く「ラクシュミー女神が財宝をクペーランに譲ったらしいわ」。

「中国や日本の神さまなんだろう？」と説明を求められたのが、今度は私だ。「これは布袋である」言ったはいが、他を排して「布袋」と押し通す根拠となると、じつは、はなはだ心もとない。せいぜい「みてくれ」がそうだと言う以



コインを貯めて「功德積み」

外ないのだ。結局、呼び名が一つ増えただけである。「日本ではホテイと呼ぶらしい」。

ともかく、出所不明で断片的な話があらず巻くのだが、いまだ正体は定まっていない。

### どう拝むべきか いまだに手探り状態

話を聞いていくうちに意外に思ったことがある。塑像の正体もさることながら、人びとの関心はむしろ「いかに拝むか」という方法に向いているのである。正体不明なのに、拝み方に関心が向かうのはどうもヘンな感じである。けれども、そのうちヘンなのは私のほうのような気もしてきた。

「正体不明」、なれど「効験あらたからしきもの」。なれば「いかにして効験を得るか」が気になるのは道理である。それを前に、これは何か、と思索に暮れる者があれば、

そちらが風変わりということになるんじゃないか。拝み方をもう始まっていた。「お腹

鈴木 晋介  
すずき しんすけ  
民博 外来研究員

スリランカをフィールドに研究活動を行う。専門テーマはプランテーション居住エリート・タミルの宗教実践と文化変容。大真面目で、も、くすくすと一緒に笑えるような生活の世界に惹かれている。

## 十人十色の「これ、なんだ？」

「富や幸運をもたらすがたいものらしい」。これは大方の一致するところだが、塑像の正体となると人びとのあいだでも定かではない。名前はある。よく耳にする名は「ラーフィング・ブッダ（あるいはゴッド）」だ。風水ビジネスがこの名で売り出しているのである。問題は、それが何なのか、それが街の人びとにもよくわからない。

風水ビジネス側もこの点、正



キャンディ市街。海外出稼ぎ斡旋の看板も。流動する人、モノ、情報……



## 編集後記

先月号の西アジアの常設展示リニューアルに続いて、本号ではアフリカ展示のリニューアルが特集となっている。かつての常設展示にあった多数の仮面や神像、あるいはヒョウタン製品の大群が退場し、あらたにニャウの仮面やプリント布、ビーズなどが登場した。また、農具や狩猟用具が少なくなつてキオスクや床屋、カフェテラスがあらわれた。考古学的な発掘現場も紹介されている。

新展示場では無文字社会が無歴史社会ではないことを主張し、現在のありようにつなげようとしている。くわえて、斬新なデザインや意匠にみられるように、創造的な世界が紹介されている。以前のやや泥臭くおどろおどろしい展示場になじんだ方はその変貌ぶりにおどろくであろう。

4月号から執筆者の紹介がのるようになった。また、記事にリードをつける工夫もこらしている。読者の反応が知りたいものである。(中牧弘允)

### 次号の予告

みんなくインタビュー  
上橋菜穂子

## 月刊みんなく 2009年6月号

第33巻第6号通巻第381号 2009年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史  
中牧弘允 三尾稔 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 京都通信社

印刷 市蔵図書

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
- 特別展示場または常設展示場観覧料が必要です。
- \*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究の内容」、「調査している地域・国の最新情報」、  
「展示資料にまつわる情報について」お話しします。

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

6月の開催

6月7日(日)

話者: 池谷和信

(民族社会研究部教授)

話題: アフリカの文化を考える

場所: 常設展示場入口

6月14日(日)

話者: 山中由里子

(民族文化研究部准教授)

山岸智子

(明治大学准教授)

話題: シーア派の哀悼行事

場所: 西アジア展示



西アジア展示

6月28日(日)

話者: 上羽陽子

(文化資源研究センター助教)

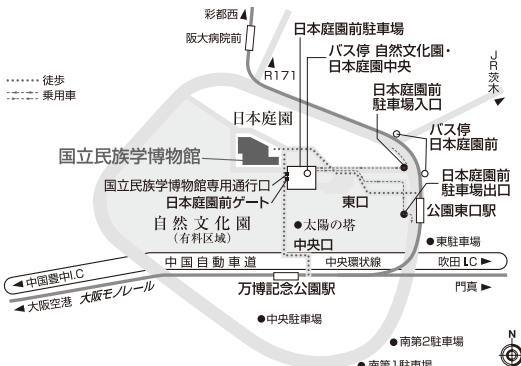
錦田愛子

(早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手)

話題: 衣装からみるパレスチナ・ディアスポラ

場所: 西アジア展示

★6月21日(日)は、「音楽の祭日2009」(無料観覧日)のため、お休みします。



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

